

「やっと着いたぁ！」

勇太達がデジタルワールドに漂流して数十日経ちヴォーボモンの故郷であるレジストシティに辿り着いた。

「レジストシティってなんか全体が図書館みたいだね。」

「私、本嫌あい。」

「きらあい。」

レジストシティの街の入り口には複数の立方体が組み合わさったオブジェがあった。

街の建築物は外見から図書が並べられているものばかりであった。

「レジストシティはデジタルワールドの色々なデータが流れ着いてくるんだ。」

「データ…」

なんとなくは感づいていたがこの世界って…

「それで、街の長老のジジモンのジジ様とババモンのババ様が僕に選ばれし子供…

勇太がこの世界に来るって教えてくれたんだ。」

「ジジモンのジジさ…なんか紛らわしいわね。」

「デビドラモン、ギルモンのとき、1かいあったことある。ジジさまいろんなことしてる。ババさまたまにこわいけどやさしい。」

「よお泣き虫ヴォーボモン。へえ本当にお前がパートナー連れて来たのかよ。」

「オーガモン…。」

手に持つ棍棒を両手でパスしながらオーガモンと数匹のゴブモンがヴォーボモンに話しかけてきた。

「ヴォーボモン…知り合い？」

「…」

どうにもオーガモン、ヴォーボモンの様子から友達という感じではなさそうだった。

光もその雰囲気を感じ取ってか目つきが鋭くなっている。

「僕がどうだろうと、お前には関係ないだろ。」

「へへへそう邪険にするなよ。俺とお前の仲だろ。泣き虫、飛べないヴォーボモン。うおい。うおい。」

オーガモンがヴォーボモンを小突く。

いつもならすぐに噛み付くヴォーボモンがどこか大人しかった。この感覚を勇太も光も知っていた。

「おい。やめろよ。知り合いみたいだけど感じ悪いぞ。」

勇太がヴォーボモンとオーガモン達との間に割って入る。

「へっ初めて見るけど人間様ってのは随分勇敢なんだなあ。こんなに細っこくて成長期のデジモンかと思ったぜ。こんなので異変が解決できるのかねえ。」

オーガモンは勇太をその長い爪で突つつく。

…乳首に当たっている。怯む以上にこっちの方が嫌だと勇太は思った。

「おい。緑色のパンイチ共。その乳首は私んだ。さっさと失せな。」

「う`う`う`う`う`」

頼むからこれ以上やめてくれ。勇太は苦虫を噛み潰した顔をしながら切に思った。

「げっデビドラモン!？」

「おい、ビビってんじゃねえよ…チッ。そんな人間連れて来てもお前がジジ様になれる訳ねえだろ。ジジ様とこ行くんじゃねえぞ。」

オーガモンがヴォーボモンに近寄り囁く。ヴォーボモンはやはり大人しかった。

「二度とウチの黒いのの前に現れんなッタコ。」

去っていくオーガモン達に光は中指を立て悪態をついた。

「大丈夫か？ヴォーボモン。」

「いかにもな奴だったわね…あんな奴なんてイチイチ気にすんじゃないわよ。あんたもウジウジしてたらぶん殴るわよ。」

「デビドラモンの木の実食べる？」

「…ごめん。ありがと。うん！ジジ様のとこ行こみんな！」

ジジモンの家はレジストシティの一番奥まった箇所にあった。行くには様々な施設を入り経由しないと辿り着けなかった。

「ヴォーボモンのにいちゃんかえってきたんだ！」

「わぁ！ほんもののにんげんだ！」

「ほら話かと思ったけど本当にやったんだな！ヴォーボモン！」

行く先々で、幼年期や成長期のデジモンに話しかけられていた。

「なによ。てっきり浮いてんのかと思ったら割と慕われてるじゃない。」

勇太と光はヴォーボモンに話しかけてきた幼年期のデジモンを抱っこしながら歩いた。

「ヴォーボモンは小さい子の面倒見もいいし優しいからね。弱いし無鉄砲だから自分より強い奴に噛み付くから面白くない連中もまあまあいるから、飛べないとか馬鹿にされる事も多いけどね。」

「もうちょっとクレバーに動いて欲しいよね。いいところいっぱいあるのに。」

「うるさいなあベアモン。テリアモン。どうせ僕は無鉄砲だよ。」

こちらは本当に友達なのだろう。勇太はなんだか安心した。

「それにしても成熟期以降のデジモンあんまり見ないね。」

というか全くいない。他の場所では会うこともあったのにここでは最初のオーガモンくらいしか成熟期デジモンに会っていない。

「うん…そうだね。」

デジモン達の空気が一気に重くなった。勇太はやってしまった事を察した。隣で光から刺すような視線と後ろからデビドラモンの「あ…。」という声が聞こえた。

「その事についてはワシから話そう。」

声を掛けたのは白髪に大きく蓄えたあごひげが特徴的な老齢の人間の見た目に近い…恐らくデジモンであった。

「ジジ様！」

ヴォーボモン達が駆け寄る。件のジジモンらしい。

「人げ…デジモン？」

「ジジモンというか本当にジジイじゃない。「目上のものになんちゅう言い草じゃ！」

「いった！」

光は後ろから箒で叩かれた。そこには口を縫い合わせた老女の姿のデジモン。ヴォーボモン達の話から察するにババモン。ババ様であろう。

「勇太このババア叩いた！」

「今のは光が悪いよ。」

「いやいや。しかし、よく来たのう。ワシはジジモン。そっちがババモン。皆からはジジ、ババと呼ばれとる。」

「主らが日野 勇太に鬼塚 光そしてパートナーのデビドラモンじゃな。」

「よ…よろしく…お願いします。光。」

「…お…お願いします。」

「おねがいします！」

「えと…俺達の事知ってるんですか？」

「ふおっふお。そう固くなるもんじゃないぞ勇太ちゃん。ジジは知っている事を知っているだけじゃ。だから主たちの疑問に全部答えられるわけじゃないぞ。ささっ立ち話は腰が痛くてのお。ウチで話すかね。」

「光ちゃんあんた細っこいね！ちゃんと食べてるんかい!?今ババ飴ちゃんしか持っていないけど後でちゃんにご飯作ってあげるからね！」

そういつてババモンは光に黒色の飴を渡して先を歩いていく。

「こっちの世界でもジジババってよく分からないお菓子くれるのね。」

そう言つて光は貰った飴をどこか嬉しそうに頬張った。

「それでどこから話すかのう…」

「するか!するか!」

勇太達が案内されたジジモンの家は如何にもな日本家屋の茶の間であった。

ただ窓にはアクアリウムのように魚と飛行機が泳いでおり、やはり異質感があった。

「全部!全部よ!ここってなんなの!?そもそもデジモンって!?私達なんでこっち来ちゃったの!?元の世界に帰れるの!?」

「光ちゃん。1つずつさね。せっかちな事ばっか言っているとババみたいにすぐ老け込んじゃうわよ。お茶に、隣街のベジーモンのババに貰ったケーキあるから食べんしゃい。」

「けーき!けーき!」

手慣れてる。光は久々の甘味に夢中でそっちに意識が持っていかれて静かになった。ババモンは勇太に親指を立てた。

「まずは、この世界からのう。勇太ちゃんを見るに感づいてるんじゃないかの?」

「あっいえ…その…俺も合ってるか分からないんですが…」

ジジモン、ババモンは静かに勇太の発言を待ってくれた。

「雑多に自然の中にも電子部品が組み込まれてるような…その異質な光景に、デジモン達。それにレジストシティとかデジタルワールドとかの名称。なによりデジモン達が進化の時に見せた変化の仕方。」

勇太はデビドラモンがギルモンから進化するときのまるでフレームのような皮膚の内側を思い出した。

「情報の…文字通りでデジタルな世界なんじゃないかって…。」

「ふむ。やはり気付いておったか。そしてその不安そうな顔は」

「…俺や光も身体が…」

「どうということ？」

光がケーキを食べながら勇太達に聞く。

「デジタルとは勇太ちゃん達の世界でいう情報の世界。そこは決して物質的なものじゃない。そうすると考えるのは2つ。

1つ、意識つまり心だけが別れて飛ばされて、肉体は今まで通り生活している。

2つ、肉体が分解されて意識のみがこっちに飛ばされている。」

「私達、幽霊になったって事!？」

「れでいが口に含んだ物出すんじゃないよ！」

光はババモンの箸で頭を叩かれる。

「安心せい、光ちゃん。勇太ちゃん。主らは肉体事ロードされてこのデジタルワールドに来てる。スワンプマンも幽霊もないから安心するんじゃ。」

「スワ…？まあならいいわ。」

「それじゃあ母さん達も心配してるんだ。それにここで死ねば…。」

「まあそこら辺は察しの通りじゃ…」

「…私は…まあ心配ないわ。で、結局このデジタルワールドになんで私達が呼ばれたの？ヴォーボモン達はなんか異変？解決してくれとかゲームみたいな事言ってたけど？」

「うぬ…最近になって各地の街の成熟期以上のデジモンが失踪する事が度々起こるようになったのじゃ…それに今まで存在しなかった街や土地がいつの間にか現る事も起きている。デジタルワールドがデータの世界だし稀に起こる話ではあるのだが、頻度があまりにも多すぎる。そしてそこに失踪したデジモンがいたのじゃ。」

「じゃあさっさと連れ戻せばいいじゃない。」

「…何者かにデータを弄られているのか。まともな応答もないしこちらに攻撃的になっておる。ただ黙々と何かの目的の行動をしているみたいなのじゃ…。

攻撃的なデジモンも増えておるしデジモンの仕業とも言えぬ不可思議な現象も多くなった…経験則となるが闇の勢力の仕業じゃろ。」

「だから、成長期までのデジモンしかいないんですね。」

「いつもいっしょにいてくれるけんたるものにいちゃんたちもいなくなっちゃた…」

「もうあえないのかも…」

不安そうに周りのデジモン達はどよめいた。中には涙ぐんでる子もいる。

「…」

勇太はその顔を唇を噛んだ。それは様々な感情によるものであった。

「そして、こういったデジタルワールドに異変が起きると決まって人間の世界、リアルワールドから主らのような人間の子供が呼び出されそのパートナーデジモンと共に異変を解決してくれたのじゃ。

一体何者が勇太ちゃん達を選んでののかそれはジジにも分からん。すまんの…」

「自分達が困ったら勝手に呼び出して、危ない目に遭わせるなんて随分都合のいい話ね。」

「光。」

「いいんじゃ…勇太ちゃん。それについては光ちゃんの言う通りじゃ…本当に申し訳ない。」

ジジモンとババモンは深々と頭を下げた。周りにいるデジモン達は不安そうな顔でこちらを見ている。

「…まあいいわよ。どうせその異変を解決しなきゃ帰れないでしょ。ヴォーボモン達の情けない顔に免じてやってあげる。その呼び出した奴にも文句言わなきゃ気が済まないしね！でしょ勇太！」

「光！勇太！」

「ひかり！」

「あっこらデビドラモン、暑苦しいわね抱きつくんじゃないわよ！」

「…」

「勇太？」

勇太は黙ってジジモンを見た。ジジモンもその視線の意味が分かっているようであった。

「…すまん勇太ちゃん。」

「何よふたりで黙って気色悪いわね。」

「そこの成長期のヴォーボモンとヒョロヒョロの人間様じゃ役者不足って事だよ。」
「オーガモン！」
レジストシティの入り口であったオーガモン達がジジモン達の家に入ってきた。入口と同じように両手で棍棒をパスしながら近づいて来る。
「こりゃ！オーガモンものの言いようってのを知らん奴じゃの！無礼じゃぞ!!」
「ババ様、でもそういうことなんでしょジジ様？」
「ちょっとなんなのよこいつらさっきから滅茶苦茶感じ悪いじゃない。」
「ヴォーボモン…俺が上手く進化させられないのも知ってるからですね。」
「…ここからの旅は今まで以上に危険な旅になる。光ちゃんとデビドラモンちゃんは完全体へ進化させることができるが今のヴォーボモンと勇太ちゃんじゃ余りにも危険すぎる。」
「だから白黒付けようってこったよ。てめえらかそれとも俺か!？」
「へへどうせオーガモンさんに決まってますがね！弱虫ヴォーボモン」
「はあ!?あんたが!?あんたみたいな腐れ脳みその筋肉野郎に務まるわけないでしょ!？」
「じゃあその進化もできない弱虫野郎に務まるのかよ？」
「…んぐっ!?あんた達も黙ってないでなんか言いなさいよ!？」
「…とりあえずジジさんの言いたいことは分かりました。少しヴォーボモンと話させてもらえますか？」
「うぬ…。」
「おいおいおい！なんだあ!?まさか怖気づいた…「デビドラモンごめん。お願いしていい？」
「わかったゆうた！おい！う`う`う`う`う`う`う`う`!!!」
「てめえ！おい！離せ！」
「離せ！こら！ウィルスが移るだろ!!」
デビドラモンがオーガモン達を引っ張り外に連れ出し追い払う。

「明日、正午から広場で決闘だってさ。」

ヴォーボモンはレジストシティが一望できる丘にいた。勇太はヴォーボモンの隣にスッと静かに座った。

「そっか…」

「俺はさ…やっぱり光達と一緒に行きたい。あの子達の…誰かの悲しい顔も見たくない。」

「それは…僕も同じだよ。」

「でも、ヴォーボモンの辛い顔だって見たくないよ。」

「なんだよ…何が言いたいんだよ。」

「…俺はヴォーボモンとならきっと色んな辛い事も乗り越えられる気がするんだ。」

「はっきり言えよ！勇太も僕がビビってるんだって！！ビビって立ち向かえない弱虫ってはっきり言えよ！！」

「そんな事思っていないよ。でも俺も保育園の頃のカキ大将が今でも怖いんだ…分かるんだよ。だから、ヴォーボモンが戦わないって選ぶなら俺はいいと思うし、他の誰にも笑わせない。」

「なんだよそれ…。分かんないよ勇太…。」

「うん。ごめんね。でも俺はヴォーボモンと一緒に旅したい…だから待ってるよ。」

勇太はそう言って立ち去った。

「なに気取った言い回ししてんのよ…」

ヴォーボモンがいる丘の建物の影で光も聞いていた。

「やっぱそうだった!?…うわ!? 伝わったかな…俺こういうの慣れてないんだよ…」

勇太は光の横で座り込んだ。

「そんなことしなくても首根っこ掴んで連れてけばいいのよ。すぐにいつもの調子に戻るわようせ。」

「俺はそうは思わないんだ…苦手意識っていうのかな…上手く言えないけどそういうの持ってる相手に立ち向かうって多分、今までに会った完全体の敵に立ち向かうより辛いし怖いんだと思うんだ…」

「…まあ分からないでもないわ。」

「それに立ち向かわないで逃げても前に進めるならそれでも俺はいいと思うんだ。」

「…そんな甘い事でどうにかなるもんじゃないわよ…」

「ジジさんが言いたいのもそういうことだと思う。だから俺達を試そうしてるんじゃないかな。」

俺はヴォーボモンなら立ち向かえると思ってる。でも、それはヴォーボモンが決める事だ。だから俺待つよ。明日。」

違うわよバカと光は呟いた。

「来なかったらどうするわけ？」

「…そしたら俺は気まずい事になるかも。」

「なによそれ」

勇太と光は笑い合った。

その日はジジモンの家で泊まる事になった。振舞われた夕飯はデジタルワールドに来てから一番今までの世界に近い食事が出された。

米に、味噌…ではない何か茶色の甘みと旨味のあるスープ。よく分からない野菜がゴロゴロ入っていて旨い。畑から取れたという肉をチーズと野菜で絡めたもの。虫の佃煮など様々なものであった。

「こりゃ光ちゃん!しっかり野菜も食べんしゃい!栄養が偏ると身体壊すわよ!!」

「いやよ!そもそもなんで虫なんか出してるのよ!」

「日本でもイナゴの佃煮とか蜂の幼虫の揚げ物とかあるし、それに結構美味しいよこれ。」

「飯時にグロい話するんじゃないわよ勇太!」

「光ちゃん!箸で人を指すのは無礼じゃぞ!勇太ちゃんも若いんだからもっと食べんしゃい!!ほら!これも食べる!」

「あ…ありがとうございます。いや、もうご飯2杯もいただけてますし…あっこのキャベツの炒め物美味しいよ光。俺が作るより全然美味しいし食べてみなよ。」

「ババさま、デビドラモンうまきはしつかえない…」

「そりゃあすまんかった!今スプーン持ってくるから待ちんしゃい!」

「あっ俺取ってきますよ。」

「ええ!ええ!勇太ちゃんはお客様なんだからしっかり食べんな!」

「ジジはお客じゃないんだから、もっと動きんしゃい!」

なんだか久々に賑やかな食事だった。光も不思議とジジさんと…特にババさんには打ち解けていた。細かな所作からくるふたりの人徳によるものかもしれない。

ただ、そこにヴォーボモンの姿はなかった。

「…ん。」

まどろんで気が付いたら夜が明け大分日が高く昇っている。眠い。疲れた。勇太達は どうしてるだろうか。お腹が痛い。でももう間に合わないだろうな…。もういいよね…全部。

オーガモンとの決闘の広場には多くのデジモン達が集まっていた。もうそろそろ正午になる。

「オーガモンが皆に吹聴したのか困った奴じゃな本当に…」

「おいおい!肝心のヴォーボモンがいねえじゃねえかやっぱり泣き虫は情けねえなあ!なあみんな!!」

「飛べねえけど逃げ足は早えみたいじゃねえか!」「逃げ足ヴォーボモン!」

「あんた達こういう時はこういう風に中指立てて思いっきりガン飛ばしてやるのよ!」

「[あゝあゝあゝ!?なめたくちたたくとはあがたがたいわせてスカモンになるまでウンコもらさせてやっぞ!!」」

光とデビドラモン。ヴォーボモン側のデジモンは野次を飛ばす観客のデジモンに中指を立てていた。

「光…教育に悪いから変な事吹きこまないで…。」

「うっさいわね!何が来るよ!あの黒バカ全然来ないじゃないの!どうするのよ!!あんな緑肌顎外れパンイチ露出狂野郎に好き勝手言わせて!!」

「…うん。」

勇太は依然として前を向いていた。

「たく!どいつもこいつも!!付き合ってらんないわよ!!!」

「ひかり～!」

光はガニ股で怒りながらデビドラモンと一緒にどこかに行ってしまった。

「ゆうたにいちゃん…ヴォーボモンにいちゃんくるよね…。」

ボタモンが不安そうに聞いて来る。勇太はボタモンの頭を静かに撫でた。

「来るさ。必ず。」

「おい!もう正午だぜ!どうすんだよ!?ジジ様!」

「…やむおえん。ヴォーボモンが正午になってもこなければオーガモンの不戦勝とし、異変の解決はヴォーボモンではなくオーガモンに託す事とする!」

「だとよ!?カスなんかがパートナーになると恥かしいまうな!ひよろもやし野郎!」

「…」

勇太は黙ってオーガモンを見据えた。

「あんたまだこんなとこいたの。」

「光…。」

広場から去った光達はヴォーボモンのいる丘に来ていた。

「なんだよ勇太の次は光まで…。」

光はヴォーボモンの隣にドカッと勢いよく座った。デビドラモンはちょこん後ろの方にオドオドしながら座った。

「緑糸の露出狂が調子こいてるわよ。あんた行かなくていいの？」

「もう…いいよ。もう。」

「あんたが良くても!!勇t…。チッ。

ヴォーボモン。あんた、なんで選ばれし子供に…勇太に会いに来たの？」

「・・・」

「ふん。まあ大体分かるわよ。惨めな鬱屈とした自分を変えたかった。やせ我慢しても、この街で、あの露出狂へのあんた見てれば大体分かるわよ。」

「…笑いたきゃ笑いなよ。」

「笑うわけないでしょ。」

ヴォーボモンが顔を上げると光はまっすぐ見つめていた。それに耐えられずヴォーボモンは顔を伏せてしまった。

「私だって今までの自分から変わりたいと思ったのよ。ここに来て、私みたいなクズでもよく知らなくてもバカにしないで受け止めてくれて、自分が惨めになっても他人の所為にしないで前向いて諦めなかったバカを見て、こいつが…こいつらが手握って隣に居てくれるなら怖くても立ち向かってやろうって。」

「それは…勇太や光だから…きっと選ばれし子供だから違うんだよ。」
「あんただってそうよ！成長期で碌に進化できなくても、あんたは一度だって逃げてない。デビドラモンと一緒に肩並べてたじゃない。」
「デビドラモン、いっかいもヴォーボモンがばかとかじゃまとかおもったことないよ。」
「あんたが自分を信じられなくなるなんてのは正直よく分かるわよ。でもね、信じられなくなったらあんたを信じているあのバカ。
…バカ達の私達を信じなさい。」
「…そんなのただの重荷だよ。自分のエゴで他人を縛り付けてるだけだよ。」
「そうね。ずっと私もそう思ってたわ。ジジイやおばあちゃんからの思いを私は受け止められなかった。でも、あんたのここが少しでも動いたならきっとそれは…」
光はヴォーボモンの胸に指を指した。
「きっと…きっと変わるはずよ。過去は変えたくても変える事はできないそれでも今と未来だけは…。」
「僕は…。」

「おい！もう正午だぜジジ様!!!」

「まだ、1分あるはせっかちじゃなの。」

「へっ来ないんだから変わらないだろ。」

周辺のデジモンも帰り始めているのもいるヴォーボモンや勇太に対しての野次や罵倒も多くなってきていた。

「あと5秒！」

「4！」

「3！」

勇太は下唇を噛んだ。

「2！」

「い…「ちょっと待ったあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

デビドラモンが勢いよく広場の真ん中に突っ込み土煙があがる。

「勇太!!!」

「ヴォーボモン!!」

ヴォーボモンは勇太に駆け寄り抱きついた。

「遅いよ。」

「ヒーローってのは遅れてくるっていつも勇太言ってたじゃん…ごめん！でも俺！」

「分かってる。行こう。」

落下地点から咽ながら光とデビドラモンが観客席に戻る。勇太達とすれ違う。

「光。デビドラモン。ありがとう。」

「げほ。げほ。ふん！ほんとよ手のかかる馬鹿がふたりもいると苦労するわよ！」

「ヴォーボモン、ゆうた！がんばってね！」

「別に結果とかはどうでもいいけど、せっかくだから負けんじゃないわよ！」

「「うん！」」

オーガモンが前にやって来る。いかにも面白くないという顔をし棍棒を両手でパスしながら近づいて来る。

2人と1人の顔がこれでもかと近づき睨み合う。

「随分と待たせるじゃねえか、俺あてっきりビビって逃げ出したんじゃねえかと思ったぜ。」

「そいつは悪かったね。スカモン大王級のウンコが出たもんでね。」

「へっ!まあどうでもいいぜ俺あお前のその生意気な顔をそのウンコみてえにぐちゃぐちゃにするのをずっと楽しみにしてたんだからよ。それにしても2対1たあ如何にも自分ひとりじゃ何もできねえお前らしいじゃねえか。」

「昨日の時点でジジ様も認めてたろ。お前だって武器持ってんじゃねえか。バカにしてるヒョログキの俺とヴォーボモンに今更そんな事言い出すとか大分ビビってんな? ほんとは口だけでウンコ漏れそうじゃねえのか?」

「「「…」」」

一瞬の静寂の後轟音と土埃が舞う。オーガモンの持つ骨棍棒が地面を割りひとひとりなら入れそうな大きさのクレーターを作る。

「あの露出狂ほんとに勇太達を殺すつもり!？」

土煙からヴォーボモンの肩を掴み引っ張られながら勇太が出てくる。

「相変わらずなんつう馬鹿力だよ!？」

「ヴォーボモンあの棍棒避けながら土煙を回せていって!やっぱり危険なのはあの棍棒だ!俺に考えがある!」

「分かった!」

「プチフレイム！」

ヴォーボモンは火球をオーガモンと地面に当てていく。だが、オーガモンへの火球は適格に棍棒にかき消されていた。

「チッ目くらましかよ逃げるのだけは相変わらずうめえ奴だよ！てめえは!!!!」

やたらめったらにオーガモンは棍棒を振り回す。衝撃は観客席を揺らすほどであった。

「何逃げてんだよ！逃げずに戦え!!」

観客からの野次にヴォーボモンの身体が反応するのが勇太に分かった。

「ヴォーボモン大丈夫。落ち着いて耳を貸すな。」

「分かってる！」

しかし、ヴォーボモンの声には興奮が隠せていなかった。当たり前であるが焦りと恐怖があるのだろう。

「…」

勇太はオーガモンの動きを見た。オーガモンは一步だけ遅いとはいえ土煙の中でヴォーボモンと勇太の動きを把握できているようであった。

口だけではない。やはり闇雲じゃなくて直観でも筋道を立てて攻撃している。さっきより棍棒を振り回す頻度が落ちて来ている。こちらが分かるんだ。

オーガモンは棍棒を両手でパスしながら、狙い時のみ棍棒を的確に振り下ろしてきた。動き回る量では圧倒的にこちらの体力の消耗が早い。

「ヴォーボモン…！」

土煙の動きが数瞬やんだ。ヴォーボモン達の動きが止まった。

オーガモンは両手で棍棒をパスしながら当たりの気配を探っている。

土煙が何かが飛んでくる。オーガモンはそれを捉え棍棒を振り下ろす。轟音と衝撃、土煙が舞う。

「がっ!!!」

鈍い声が飛ぶ。

「はっ所詮こんな程度の浅知恵でどうにかできると思ってんのかよ。」

オーガモンは両手で棍棒をパスしながら声の方向に向かう。

「うっぐ…はぁ…はぁ」

うめき声は苦しそうに絞り出されていた。

「ヴォーボモン。もう諦めろよ。ウザいしキモいんだよおま「今だ!ヴォーボモン!!!」

「人間の声!？」

「ブチフレイム!!!」

後方のあらぬ方向からヴォーボモンの火球が連打される。

宙に浮いていたオーガモンの棍棒は火球に弾かれ転がっていく。

土埃が晴れるとそこには腹を押さえ蹲っている勇太のみがいた。

動揺して火球の発射方向を振り向いて無防備なオーガモンの顔面、身体に火球が直撃する。

「がぁぁぁぁ!!!」

「おっもっい…!!!」

体勢が崩れたオーガモンに向かい勇太は地面に転がった棍棒を広いオーガモンに当てた。

鈍い音とオーガモンの絶叫が響く。

「勇太！」

「うん！」

ヴォーボモンが棍棒に火球を当て遠くに吹き飛ばす。

ヴォーボモンが勇太のいる位置に来る。

「大丈夫!? 勇太!？」

「掠っただけ…！それより一気に畳みかけるよ!!!」

「うん！プチフレイム!!!」

ヴォーボモンは出せる限りの火球をオーガモンに向かい連射する。土煙とオーガモンの絶叫が響く。

ヴォーボモンの口から黒い煙が上がり、咳込む。オーガモンの声が止み土煙だけが舞ってオーガモンを覆い隠す。

「はぁ…はぁ…」

「まさか…ヴォーボモンにあのオーガモンが…」

「オヤブン…」「オヤブン…」「あの野郎…！」オーガモンの取り巻きのゴブリモンから動揺の声が上がる。

「やっ…「霸王拳!!!!!!」」

誰もがヴォーボモンの勝利を疑わず、勝利を宣言しようとした時それをかき消すようにオーガモンの雄叫びと闘気のようなエネルギー波がヴォーボモンと勇太を吹き飛ばした。

「がっ!!! あ…おえゝ!…げほげほ…」

ヴォーボモンも倒れて中々立てずにいる。人間である勇太のダメージはより深刻で口を切っただけなのかそれともどこかの器官を傷つけたのか口から血を吐いていた。「俺が!!!! 俺様は!!!! 強く!!! 強くなったんだ!!!! 何もしないで!!! 人間に会っただけで!!! 強くなった気であるてめえとは違うんだああああああああああ!!!!!!」

土煙から怒号と共にオーガモンが現れた。身体には流血と炎症が見て取れ確実にダメージはあるが、その所為なのか強い興奮状態が見て取れ尋常な様子ではなかった。

「まずいの光ちゃん…あやつ興奮で意識が飛んでおる。ヴォーボモンこれまでの旅で強くなっているようじゃが逆に仇になっておる。ワシらも行く。パパ!! これ以上は駄目じゃ!!!」

「ひかり!!」

「ええ!!」

「がああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

光達がオーガモンに駆け寄るより速くオーガモンが雄叫びと一緒に勇太達に向かって行く。

「間に合わない!!!」

オーガモンがこちらに向かってくる。勇太は…駄目だ。ダメージが酷すぎて動けそうにない。

やっぱり小手先だけじゃ駄目なのかな。このままじゃ殺される。やっぱり僕は駄目なんだ。空が太陽が遠ざかる。

このまま…目を閉じ…でも…でも!嫌だ!!勇太は僕を信じて待ってくれてたんだ!!!僕の心に火を燈してくれたんだ!!!僕を信じてる勇太を!勇太が信じてる僕を!!!裏切りたくない!!!

「ああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

ヴォーボモンの雄叫びと共に勇太のデジヴァイスが輝き出した。それはデジヴァイスのヒビを広げる程の光であった。

「死ねええええええええええええ!!!!!!!!!!」

「ヴォーボモン!!!!進化ああああああああああ!!!!!!!!!!」

ヴォーボモンの身体が光輝く。オーガモンの闘気を帯びた拳が勇太とヴォーボモンに振り下ろされる。

「ヴォーボモン…?」

蒸気と火。熱が広がる。オーガモンの拳と勇太の間に火を噴く黒い巨体があった。

「ラヴォーボモン!」

「ヴォーボモンが進化した…？」

リベリモンの時のような一時的な光を纏った進化ではない。ヴォーボモンは完全にラヴォーボモンへの進化を遂げた。

「てめえがなんで!!!!」

ラヴォーボモンがオーガモンの拳を弾き、観客席の上部へ吹き飛ばす。

「遅いよラヴォーボモン…。」

「ごめん。勇太。行こう。」

立ち上がった勇太はラヴォーボモンの背中に乗る。

「幾らパワーが上がっても!!!その巨体じゃすつとろいだろ!!!!」

「うわ!!!???」

オーガモンは観客を巻き込みエネルギー波を飛ばす。

「あいつ!!!勇太掴まってる!!!」

ラヴォーボモンはその巨体とは裏腹に素早く駆けた。地面から円を描くようにエネルギー波を避け、観客席上部の壁に飛び移り駆け炎を纏った尾で広場中央にオーガモンを吹き飛ばす。

「がっ!!」

「勇太!ラヴォーボモン!」

「大丈夫!光!ここは任せて!他のデジモンを避難させて!!!」

「調子乗ってんじゃねええええええええ!!!」

オーガモンはエネルギー波を全方位に乱射する。

オーガモンを中心に円を描くようにラヴォーボモンは避けていく。

轟音が止むとそこにラヴォーボモン達の姿はなかった。

「どこ…!だ!!!」オーガモンは地面の変化に気が付いた。

振動と轟音と共に地面が盛り上がり何かが飛び出してくる。

「地面にあった盛り上がった土!!!霸王拳でボコボコだから気が付かないとでも思ったかよ!!!!!!!」

飛び出したものにオーガモンはエネルギー波を当てる。だが、そこにいたのはラヴォーボモンではなかった。

「鱗…!!!!!!!???」

エネルギー波に弾かれたのはラヴォーボモンから取った表皮を盾代わりにした勇太であった。

「やっぱりまた!引っかかると思った!!!ラヴォーボモン!!!!!!今だ!!!!!!」

勇太の叫びの合図とともにオーガモンの下の地面が盛り上がる。

「グレートフレイム!!!!」

地面から巨大な火球が飛ばされオーガモンを空中へ吹き飛ばす。しかし直前でオーガモンはエネルギー波を飛ばし直撃を防いでいた。

「ラヴォーボモン!!!これで最期だ!!!」

「ああ!!!!グレート!!!フレイム!!!」

「クソがああああああああ!!!!!!!!!!覇!!!!王!!!!拳!!!!」

ラヴォーボモンの火球とオーガモンのエネルギー波がぶつかる。

両者は拮抗したように見えたがエネルギー波が徐々にかき消されていく。

「なんで!!!!なんで!!!!お前なんだよ!!!!!!!!!!!!」

火球がオーガモンを直撃し爆発した。そのままオーガモンは落ち地面に叩きつけられる。

「はぁ…はぁ…」

ラヴォーボモンはヴォーボモンへ戻っていた。

勇太とヴォーボモンは倒れたオーガモンの前に行く。

後ろからデジモン達を避難させた光達に向かってるのが分かった。

「クソ…クソ…」

オーガモンは意識が戻ったのか呟いている。

「てめえらよくも!!」

オーガモンの取り巻きのゴブリモン達がヴォーボモン達とオーガモンの間に入る。

「オヤブンはずっと努力してきたんだ!!!毎日みんなを取り戻すんだ!!!ってなのに!!なのに!!!なんでてめえなんかに!!」

「やめろ…すっこんでろ。」

オーガモンが今にも襲い掛かりそうなゴブリモン達を止め端へ避ける。

「知ってるよ…。ずっとオーガモンが…ゴブリモンの時から特訓してたのを…」

「…。」

「だから…だから!!僕も変わりたい!強くなりたいって思ったんだ!進化できなくても!強くなくても!!!」

「じゃあ!!なんで俺を否定するんだよ!!!強くなっても!!!それで負けたら!!!俺は…正しくない負け犬じゃねえか!!!!!!」

「じゃから、ワシは主とヴォーボモンを戦わせたんじゃ。」

「ジジ様…。」

「オーガモン。主の言う正しさは結果じゃ。肉と肉がぶつかり合う物理現象に過ぎない。ただ、正しさは、強くなるのは、どうあろうかとする道はひとつの数だけある。それを結果だけで正解を決めてしまえばお前はいずれ巨大な闇に飲み込まれる。奴らは巨大で底がなく蠱惑的だ。光など闇に比べれば小さく儚い。ただそれを燈し続ける心がなければすぐにでも闇に吞まれ大局的な勝敗以前にお前達を不幸にさせる。」

「なんだよそれ…。」

「勝ち負けではない。勝負の結果ではなく選ぶのは弱さを認めつつそれでもと強いものに挑める心の強さじゃ。」

「主が心優しいのはワシだけじゃないヴォーボモンも知っておる。いなくなった者を思い影で涙を流してたのも取り返すためずっと鍛錬を続けていたのも、ゴブリモンに居場所を与えていた事も。主がただの無法者ならヴォーボモンだってここまで思い悩まなんだ。」

「なんだただの変態露出狂じゃなかったのね。」

「…光。今真面目な話だから。」

「闇の力を目の当たりにし、仕方ないとは言え主は強さと結果のみを求め、それが全てを正当化する正しさと思い込んでいた。だから今度は力じゃなく心をジジと鍛えようじゃないか…異変に立ち向かうのはそれからでも遅くないで…。」

「クソ…。」

オーガモンから涙が流れていた。ただそれは決して負の感情から出るものではないと勇太達は理解した。

「すまんかったのヴォーボモン、勇太ちゃん。主らを試すような真似をして。このとおりじゃ。」

後日、怪我也癒えた勇太達は異変を解決する旅に出る事となった。

その見送りでジジモン達が見送りに来て改めて頭を深々と下げていた。

「謝らないでください。きっと俺とヴォーボモンには必要な事だったんだと思います。」

「うん！僕全然気にしてないよ！おかげで強くなれたし！」

「まっ。あの後、進化を試しても結局できなかったけどね。」

「ちゃ…ちゃんと危ないときはできるはずだよ！僕がみんなを守るんだ！」

「ヴォーボモンえらい。デビドラモンまもってもらおう!!」

「あ…頭撫でないでよ…」

「デジヴァイスのヒビが大きくなったのも、やっぱり俺には何かあるんでしょうか…。」

「ジジも知ってる事しか知らんくてすまんのう勇太ちゃん。ジジも分かん。

ただ、勇太ちゃんの目には力がある。今回の1件で確信が得れた。それは選ばれた子供なんかよりもよっぽど信用ができるものじゃ。

勇太ちゃんとヴォーボモンならきっと大丈夫じゃ」

「私達が面倒見てやるから大丈夫よ！ふん！」

「ふん！」

「光ちゃんは勇太ちゃんの言うこと聞いて！しっかり食べんじゃぞ！立派なレディにならんとすぐ愛想つかされるからの!!!こっちきたらパパ達にしっかり顔見せるんじゃよ！」

「ははは…。」

「俺もすぐに…追いつくからな。」

「うん…。」

ヴォーボモンとオーガモンは向き合った。

「…泣き虫って言ったの悪かったな。」

「うん…。」

ヴォーボモンは静かに手を差し出した。

「んっ…。」

「…はっ！」

ヴォーボモンとオーガモンはその手をお互い叩いた。

「待ってるから！」

「ああ！」

ヴォーボモン達はお互い笑い合い別れた。

勇太達はジジモンから聞いた異変が起きているという local58 という地域に向かう。
レジストシティ去る勇太達に爽やかな風が吹いた気がした。